

## 11 小野道風伝説

平安時代に新しい和洋の書を創設した小野道風<sup>おののとうふう</sup>(みちかぜ)は、この松河戸の里で生まれたとされています。

伝承ではありますが、少なくとも江戸時代中期ころから松河戸の人々は、小野道風がここで生まれたと信じ、それを誇りとしてきたことは間違いない事実です。

そして、「私も道風さまのように字が上手になりたい」と考える人も多く、自然に書の盛んな土地柄になりました。

道風公の業績や人となり逸話などについてみてみます。

- (1) 松河戸誕生の伝説…………… p288
- (2) 道風の逸話…………… p292
  - ① 柳に跳びつく蛙、 ② 道風の人気、 ③ 道風の人柄
  - ④ 浄瑠璃と花札、 ⑤ 道風さんの唄、 ⑥ 道風の切手と踊り
- (3) 道風のゆかりの地 …………… p298
  - ① 道風のふるさと松河戸(小野)の里、
  - ② 道風のもう一つの生誕を祀る和邇良神社
  - ③ 小野氏の本拠地と道風の終焉の地
- (4) 道風の業績…………… p301
- (5) 道風ゆかりの作品 ……………p302
- (6) 小野氏系図・道風年譜 …………… p308
  - ① 小野氏系図、 ② 小野道風年譜



松河戸文化科学探求隊  
 隊長 長谷川 浩  
 080-3657-7052  
 松河戸町の沿革ホームページ  
<http://matsukawado.com/>

### (1) 松河戸誕生の伝説

小野道風（おののとうふう 894~966）は、遣隋使で有名な小野妹子を先祖とし、藤原純友の乱を鎮圧した小野好古の弟、さらに小野小町をいここに持つ、そんな華やかな家系をもつ道風が本当に、この地で生まれたのだろうか？ 根拠は『麒麟抄』と『塩尻』という二冊の書物にあります。

小野氏は、近江国滋賀郡小野村(和邇村小野)(現在の天津市小野)を本拠地とする、代々中央政府を構成する有力氏族でした。

南北朝時代(1336~1394)成立とされる『麒麟抄』に「道風者尾張國上條ニシテ生レ給ヘリ」とあります。

※ 庄内川流域の上条、下条、中切、松河戸の地は、平安・鎌倉時代には、上条とか和爾良(かにら)とか言われていました。

その後、尾張藩の国学者である天野信景(1663~1733)は『塩尻』に「春日井郡松河戸村の村民伝へ云ふ、松河の里は道風の生れし地なりと云々」と記しています。

それをうけて尾張藩の儒学者である松平君山(1697~1783)が『張州府志』に、「松河戸の里は道風うまれし地なり」と述べ、以後尾張藩諸学者の間に通説のようになったようで、津田正生の尾張国地名考(1816 完成)にも記述されています。

そして誕生地と伝えられる現在の松河戸町には、尾張藩の儒学者である秦鼎(1761~1831)撰文の「小野朝臣(道風)遺跡之碑」が文化12年(1815)に建てられ、それから天保15年(1844)に藩命によって編集された『尾張志』にも詳しく記載されています。

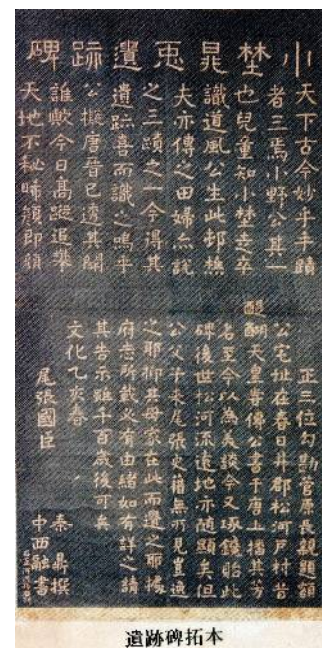
(P290~p291の図)



小野道風肖像 (観音寺所蔵)  
伝小野奉時筆(道風の子)



小野神社(滋賀県)



遺跡碑拓本

撰文 秦鼎  
題額揮毫 菅原長親  
書 中西融  
彫 河内孫右利



「小野朝臣(道風)遺跡之碑」(宅跡の碑)

写真は昭和5年頃 この頃はまだ小野社の社殿はない。右は(宅跡の碑)の拓本

小野朝臣遺跡碑  
天下古今手跡に妙たる者三あり。小野公は其の一也。児童小野を知り、走卒も道風を識る。公此の郷に生まること、樵夫も亦之を伝え、田婦も亦之を説く。三勝の一、今其の遺跡を得、喜びて之を識す。嗚呼、公は吾邦に擬して、即ち鎮なり。公の宅址は春日井郡松河戸村に在り。昔臨關天皇嘗て公が書を磨上に伝え、其の芳名を播けり。今に至るまで以て羨望と爲す。今又塚地して此の碑を後世に傳す。松河は流瀆の地なるも亦隨つて顯わら。但公が父子の屋敷に米りしこと史籍に見る所無し。豈之を逸するならんや。抑其の母屋は此に在りて之を遺したるか。帝志の載する所に抱るは、必ず由縁あればなり。如し之を詳らかにする有らば、請う其れ指示せられよ。千百歳の後と雖も可なり。

「小野朝臣(道風)遺跡之碑」には、「松河戸の村民はみな道風がここで生まれたということを伝えている」という内容が刻されています。

秦鼎は、尾張藩校明倫堂の教授で儒学者の撰文は、『塩尻』の記述と『張州府志』に依拠して、松河戸説を唱えています。

※ 小野朝臣(道風)遺跡之碑は、現在も小野社にあります。「道風がここで生まれたということを、松河戸の住民は皆が言い伝えている。しかし、確かな証拠が無いのは残念である。百年、千年後でも良いから、誰かこのことを明らかにしてほしい。」という内容が刻されています。

そして、大正4年(1915)には、愛知県より「小野道風公誕生地」の石碑が建てられ、昭和29年3月愛知県指定文化財史跡第1号に指定されました。

この「道風遺跡碑」の裏には、碑陰が書かれています。

尾藤広居(1762～1733)が書いたもので、尾藤は名古屋の人で、書は草書を得意とし、<sup>はた</sup>秦とは互いに面識があり、碑の建立を聞いて観にきた折りに記したものとされます。

※ 碑陰には、現代語訳にすると、「考えるに一般的に野公は尾張の守で麒麟抄には上条村で生まれたと記しています。上条村と松河戸は隣接し、秦先生は麒麟抄の出生記事について疑われたのでこの碑には記しませんでした。そのことを付け加えておきます。私がこの地を去るに際して道風公が雨が柳の枝に滴り蛙が樹に跳んでいる姿を見て書を各ことを悟りました。その悟りによって書を書くことに意欲がアップし努力の甲斐がありました。中国清代の江声が蛇闘したのと似ています。そこで一言すれば「故人は悟ったのです」何人かが帰ってから自分自身この道風公の悟りを思いめぐらして石に刻みました。それは志があったからです。尾藤が書きました。」(現代語訳 小野道風の風景 川地清)

とあります。

この碑が、この地にとってとりわけ重要性をもつのは、尾張藩校明倫堂の教授で儒学者であった秦鼎の撰文によるものであったからです。

享保年間の国文学者である天野信景の「塩尻」が道風生誕松河戸説を唱えていたことと、尾張藩随一の儒学者松平君山の「張州府志」の松河戸説がこの碑文の根拠となっていることです。

秦鼎は文化2年(1815)、55歳の時、その説を碑文に託し撰文したものです。

この碑が建てられることによって、以降、道風生誕松河戸説はこの地に定着し、通説かしていくこととなりました。

伝承では「父の小野葛<sup>くずお</sup>絃(近江の国和邇郡小野の出)が何らかの理由で松河戸に滞在していたとき、里人の娘との間に生まれたのが道風だった。

幼少時代を松河戸で過ごし、10歳ころに父とともに京に上り、書で身を立てた。」ということになっています。

小野葛絃は896年に越前守(地方官吏)だったことは分かっているが、残念ながら尾張国に来たという記録はありません。したがって史実とは断定できず、伝承の域を出ないことです。

しかし、少なくとも江戸時代中期ころから松河戸の人々は、小野道風がここで生まれたと信じ、それを誇りとしてきたことは間違いなく、これこそが重要な事実です。



「小野朝臣(道風)遺跡之碑」  
(宅跡の碑) 現在の設置場所、  
新小野社の向かって右側にある。



一秦鼎肖像画 山本梅造作  
名古屋博物館蔵



小野朝臣遺跡碑 碑陰



そして、「私も道風さまのように字が上手になりたい」と考える人も多く、自然に書の盛んな土地柄になりました。



小野道風誕生伝説地の祠 (旧小野社)



小野道風誕生伝説地の祠 (新小野社)



大正4年愛知県により建てられた誕生地の石碑

- ※・小野社の祠は、昭和15年に建てられた小野小学校の御真影の奉安殿でした。終戦後壊すように命令されましたが、総檜造りで他に類のない立派なもので、取壊すにはしのびずそのままの姿で、「道風屋敷跡」といわれている場所(図左)へ社殿として移しました。
- ・区画整理に伴い、平成23年に新小野社(図右)に移転しましたが、正面を南から東に向きを変えたものの、同じ場所にそのまま建てられています。
- ・小野朝臣(道風)遺跡之碑は、(図左)の右側、(図右)の右側に立っています。
- ・大正4年(1915)に愛知県より建てられた「小野道風公誕生地」の石碑柱は、(図左)の右側、(図右)の左側にあります。

※ 上条説

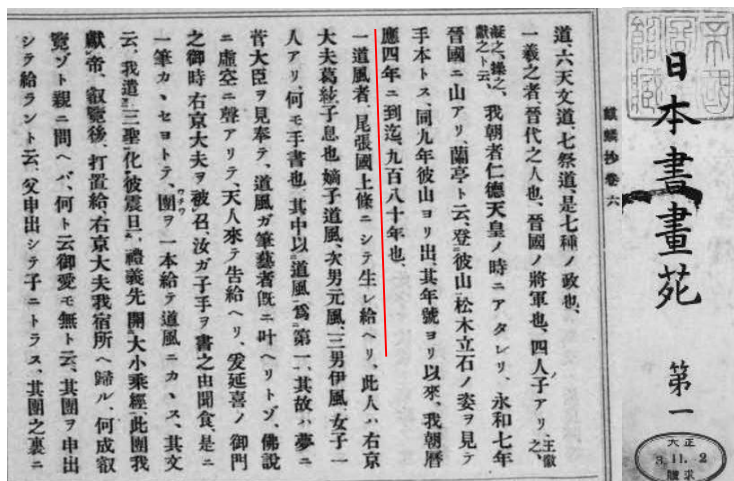
『麒麟抄』に「道風者尾張國上條ニシテ生レ給ヘリ」としており、尾張志や尾張名所図会等もこの説を継承し、上条としている。このことから上条説が云われている。

にもかかわらず、尾張誌には「今松河戸村に道風の旧跡あり、上条は其隣村なり」とあり、また尾張名所図会付録には「小野朝臣道風誕生地、松河戸村にあり、当村昔は上条村のうちなりしに云々」と言及している。

麒麟抄は書道の口伝書でもあり、中央で書かれたものであって、出身地については上条という地名の汎称を指したに過ぎないと思われる。

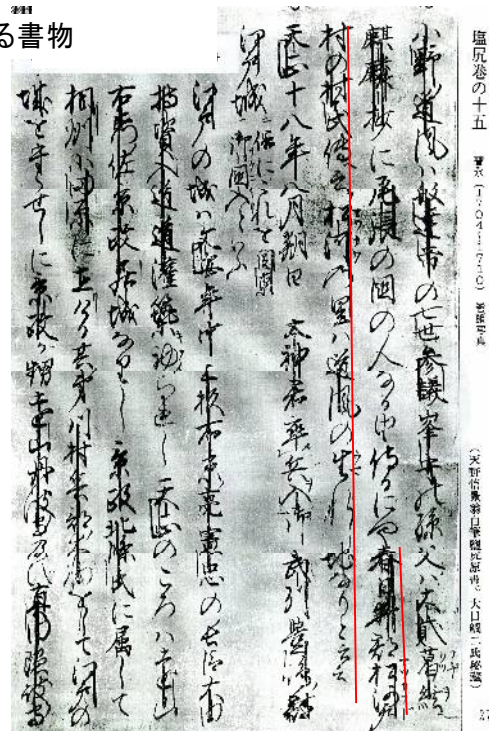
やはり遺跡地松河戸の伝承を忠実に記録した天野信景の人物史、塩尻の説が有力とされている。

道風の出生地が記載されている書物



麒麟抄の書き写し 国立国会図書館

- ・麒麟抄巻6「道風者尾張國上條ニシテ生レ給ヘリ」とある
- ・全八巻から構成されており、書法や書論の秘伝が集約されている。著者は不明で平安時代の書道家である藤原行成や空海が著したという説が有力視されていたため日本における現存最古の書論書とも言われていたが、近年の研究では否定されている



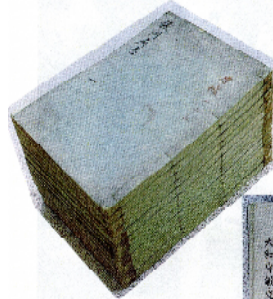
塩尻 小野道風を紹介した部分



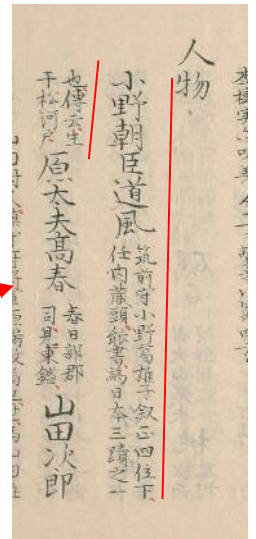
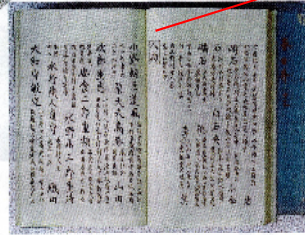


**尾張名所図会**  
小野道風出生地の図には、道風碑と八幡社が描かれている。

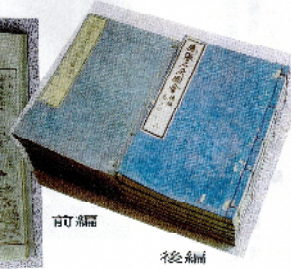
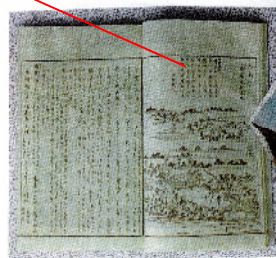
小野道風公の記載されている地誌



壺州府志（春日井郡）



尾張名所図説（後編）



春日井郡 人物

深田増藏 正徳撰  
植松庄左衛門茂岳撰校  
中尾八郎新助撰校  
岡田六兵衛撰校

小野氏系圖  
敏達天皇七代と孫春議小野奉守の長男統統  
前守葛原の道風正四位下内藏頭とあり  
麒麟抄 暦代抄中書 道風者尾張國上條  
一とありとあり此人右京大夫高経の子是也  
嫡子道風次男元風三男伊風女子一人あり是也  
手書也其中道風為第一とありとあり麒麟抄  
附録道風寛平五年没す

村上天皇康保三年十月廿七十一歳従四位上末  
工頭内藏頭と記し日本紀畧康保三年十二  
月廿七日乙亥正四位下行内藏頭小野朝臣道風  
年七十一とあり麒麟抄附録道風はかたがた  
けり能高名高名も枝末畧記百餘ありと  
あり数百部あり古者小野といふは遠くあり今松  
河村道風の四孫あり上條は澤村也

**尾張志**  
天保 15 年(1844)に藩命によって編纂された尾張国の地誌 小野道風を紹介した部分

## (2) 道風の逸話

### ① 柳に飛びつく蛙

庶民出の母を持つ道風は、藤原氏が権勢を誇る時代、政治的出世を断念して幼少より得意とした書道に精魂を打ち込んだと思われています。

『道風が、自分の才能を悩んで、書道をあきらめかけていた時のことである。』

ある雨の日のこと、道風が散歩に出かけると、柳に蛙が飛びつこうと、繰り返えし跳びはねている姿を見た。

道風は「柳は離れたところにある。蛙は柳に飛びつけるわけがない」と思っていた。

すると、たまたま吹いた風が柳をしならせ、蛙はうまく跳び移った。

道風は「自分はこの蛙の様な努力をしていない」と目を覚まして、書道をやり直すきっかけを得た。』といます。

この逸話は史実かどうか不明ですが、「柳に飛びつく蛙」の逸話が書かれている最も古い文献は、江戸時代中期の学者三浦梅園の随筆『梅園叢書』(1855年刊行)です。

それより百年早い(宝暦4年〈1754年〉初演)人形浄瑠璃『小野道風青柳硯』では、天下を狙う橘逸勢の悪巧みを道風らが阻止するという全く違うストーリーですが、その中で、道風はカエルが何度も挑戦して柳に飛びつくのを見て「逸勢が帝位に就くのは不可能に見えるが、いつか実現してしまうかもしれない」と気付く場面があります。

この『小野道風青柳硯』は元の話を作り替えたパロディーですが、既にこの頃「柳に飛びつく蛙」は誰もが知っている話だったということになります。

この逸話は、その後、第二次世界大戦以前の日本の国定教科書にも、この話が載せられ、多くの人に広まりました。

戦後の道徳の教科書にも採用されています。

明治43年(1910)の『尋常小学読本唱歌』、文部省唱歌「蛙(かえる)と蜘蛛(くも)」が登場しています。

これは二つの和洋の逸話をモチーフにしたとされる歌で、一番目は、小野道風の逸話にならったものです。

この話は多くの絵画の題材とされ、花札の札の一つである「柳に小野道風」の絵柄もこの逸話を題材としています。

春日井市は、平成2年(1990)6月、市新庁舎の会館に当たり、小野道風を春日井の顔、文化の中心としたまちづくりの構想を発表しています。

東名高速道路上での春日井市のカントリーサインの絵柄にも小野道風と蛙の絵が採用されています



小野道風と蛙

梅園叢書  
学に志し、芸に志す者の訓  
小野道風は、本朝名譽の能書なり。わかざりしとき、手をまなべども、進ざることいとひ、後園に躊躇けるに、藁の泉水のほとりの枝垂たる柳にとびあがらんとしけれども、とどかさりけるが、次第く高く飛て、後には終に柳の枝にうつりけり。道風是より芸のつとむるにある事をしり、学てやまず、其名今に高くなりぬ。



② 道風の人気

道風の書跡は字形が端正で、点画は豊潤温雅であり、優雅な趣があるからと、当時の人々に愛好されました。その当時の逸話が多く残されています。

・天徳3年(959)道風66歳の時、清涼殿で行われた詩合(参加者が左右に分かれて漢詩を作り、優劣を競い合う宮廷行事)の時、本来なら左右の詩は別人が清書する決まりでしたが、どちらも道風の書を熱望し、道風を供応したり、監禁したりする騒ぎが起こってしまったので、天皇の命令で道風が両方を清書することとなったそうです。

この試合を記録した「天徳三年八月十六日關詩行事略記」は、道風を「王羲之の再来、韋誕に匹敵する」と称賛しています。

・大江匡房(1041~1111)の談話を藤原実兼が筆記した「江談抄」に、道風と大江朝綱とが書の優劣について相論して、村上天皇に勅裁を仰いだところ、朝綱の書が道風の書に劣ることは、道風の才が朝綱の才に劣ると同じようであると仰せられた。

朝綱も能書として優れた人であったが、当時の人は朝綱の書より道風の書がすぐれていると考えていたので、この様な話が作られました。

・「源氏物語」で道風が書いた「宇津保物語絵巻」の仮名の詞書について、紫式部は「現代風で、美しく、目もまばゆいばかりに見える」と評しています。

道風はかなの書も巧妙だったと思われませんが真跡は残っていません。

・鎌倉時代の歴史書「今鏡」では「道風の時代には、その書を持っていない者は恥とされた」とあり、誰もが道風の書を手本として手元に置いていたことを記しています。

・少し時代が下がって「徒然草」では、ある人が道風筆の「和漢朗詠集」を自慢しているのを見て、ほかの人が「選者の藤原公任は道風の死んだ年に生まれているから、時代があわないのではないか」と尋ねると、「だからこそ世にもありがたいものだ」と答えたという笑い話が紹介されています。道風の書が後世において極めて貴重とされていることがわかります。

・江戸時代になると道風の書が欲しい多数の人々の要求を満たすために、卷子本や冊子本を、数行ずつに分割されました。

寶曆三年八月十六日關詩行事略記  
木工頭小野道風者、能書之絶妙也。羲之再生、仲将独歩。施其屏風、書彼門額、処々莫不盡、家々莫不珍者也。仍為一朝之面目、為万古之遺美。競其清書、左右渴望。左右相定之日、左者卑詞篤札、請以消息之書。右者差行事衆、殊含丁寧之詞。左右逐電、一時到門。方今欲寄左、則右使先詞。欲寄右、亦左書人手。持疑之間、未有一定。而十五日朝、左方送消息之間、家人称物忌、不通事由。爰右頭右兵衛督延光朝臣、藏人頭左近中将伊尹朝臣、左中弁文範朝臣等、強排門戸、突入家内。主人不堪、已以相謁。四人相携、一車同乘、到枇杷家。引入座上、盃酌頻巡、歡娛無極。丁寧詞中、清書已畢。于時左方適得此聞、上奏道風朝臣垂于先日約之由。可召仰之繪言已畢。而使牛顔到。門戸固閉、通宵宴飲、曉更相分。十六日巳時許、參入於内。蒙仰之後、更書左詩。然則左右之詩、或真或行。垂露之文、向日弥耀、秋風之体、映燈猶遠、可謂乾坤一物在於斯人。

源氏物語  
繪は常則、手は道風なれば、今めかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ。左にはそのことわりなし。

榮華物語  
左大臣に源の兼明ときこゆるなり給ぬ、一(中略)御てをえもいはずかき給ふ、道風などいひける手をこそはよにめでたき物にいふめれど、これいとなまめかしうおかしげにかせ給へり。

今鏡  
道風のぬしのいますかりける世にこそ、ひとくたりもたぬ人ははちに思ひ侍けれ。

江談抄  
天曆御時、野道風与江朝綱、常成手書相論之時、兩人議曰、給主上御判、互可決勝劣云々。仍申請御判之処、主上被仰云、朝綱書劣於道風事、譬如道風劣朝綱之才云々。

徒然草  
或者小野道風の書る和漢朗詠集とて持たりけるを、有人御相伝うける事には侍らしなれども、四条大納言撰れたる物を道風かゝん事、時代やたがひ侍らん、覚東なくこそといひければ、さ候へばこそ世にありがたき物には侍りけれとて、いよ／＼秘蔵しけり。

### ③ 道風の人柄

右の写真は、室町時代の作品で頼寿法橋が描いたと伝えられていますが、この筆者がどんな人物であったかもはっきりしません。

観音寺に保管されている道風の子の奉時が描いたとされる画(p288)とはだいぶ違います。道風は気性が激しかったとされていますが本当でしょうか。

・「麒麟抄」に書かれている道風12歳の頃の逸話です。

道風の才能を聞いた醍醐天皇が、道風の父葛絃を呼んで「この団扇に一筆書かせて献上するように」と命ぜられ、道風は「和遣三聖化中震且 礼儀先開 大小乗經 此宣團我献帝」とみごとな筆跡で書を父に託しました。

道風は天皇が特に何もおっしゃらず団扇を受け取ったことを聞いて、父に「団扇を返してもらってください」と言って困らせました。

道風は返してもらった団扇の裏に「私は、王義之の書を学んでいます。帝は書についてお分かりになっていない」と書き再び献上しました。

天皇は団扇をつくづくと見てはらはらと涙を流され自分の不勉強さを詫び、殿上を許すと言われたといえます。

自信と気骨が道風の精神的基盤になっていることを感じさせる話です。

・鎌倉時代の「古今著聞集」に、道風が空海の書いた大内裏の額をみて「美福門は田広し、朱雀門は朱雀門」といって嘲笑したとあります。「福」の字の「田」が大きすぎ、朱雀門の「朱」は「米」のように見るとけなしたわけです。

・「源平盛衰記」には、道風が空海の書いた大極殿の額を見て、「大極殿には非ず、火極殿とぞ見えたる」と笑ったので、大極殿が焼けたと記されています。

これは、大極殿が焼けたのは道風が生まれる前だから、明らかに事実と異なっています。

書風の相違を示すために作られた作り話で、道風が字形の端正さを大切にしたいのに対し、空海は筆力や筆勢を重んじた。どちらも名筆だが字形は全く異なっていました。

・道風は65歳の時に、自分を山城守にするか、近江権守を兼任させてほしいと訴えた申文を村上天皇に送り、その文章が詩文集「本朝文粹」に納められています。

申文の内容は、道風は、醍醐、朱雀、村上天皇に仕え、能書として宮廷文化を支えたこと、自分の書が唐まで伝わったこと(延長5年(927)に奈良興福寺の僧寛建が道風の書を唐に届けた)を、何よりの功績として挙げています。

道風は、自分は先祖の小野妹子のように中国に渡ることはできなかったが、その代わりに自分の書が中国に渡ったり中国人に激賞されたことを誇りに思っていたようです。



伝頼寿法橋筆 小野道風画像  
(宮内庁三の丸尚蔵館所蔵)

資料10 麒麟抄  
延喜の御門之御時、右京大夫を被召、汝が子手を書之由閑食。是に一筆か、せよとて、団を一本給て、道風にかゝす。其文云、我遣三聖化彼震且、礼儀先開大小乗經、此團我献帝。觀覽後、打置給。右京大夫我宿所へ帰る。何成數覧とて親に問へば、何と云御愛も無と云。其団を申出して給らんと云。父申出して予にとらす。其団之裏に書く、其に云く、我は晋の王義之が筆を伝て学べり、恐は帝何ぞ達筆芸平と書て進上す。或時に、御門は此団を觀覽あつて、御涙を流し、大に恥給ふ。

資料11 古今著聞集  
大内十二門の額、南面三門は弘法大師、(中略)勅をうけ給て、垂露の点をくだしけり、(中略)まことにや、道風朝臣、大師のかゝせ給たる額を見て、難じていひける。美福門は田広し、朱雀門は朱雀門と略察につくりて、あざけり侍ける程に、やがて中風して手わなゝきて、手跡も異ように成にけり。

資料12 源平盛衰記  
醍醐帝の御時、空海住持を奉て、大極殿の額を被書たり。小野道風見之、大極殿には非、火極殿とぞ見えたる。火極とは火きはまると読、未來いかゞ有べからん、筆勢過たりとぞ笑ける。去げにや、今かく亡ぬるこそ浅増けれ。



④ 浄瑠璃『小野道風青柳硯』と花札

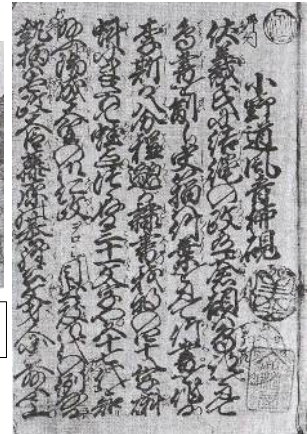
義太夫浄瑠璃の作品で歌舞伎の演目のひとつ。

五段続、宝暦4年(1754)10月に大坂竹本座にて初演されて広まり、この『小野道風青柳硯』の<蛙飛びの場>から



浄瑠璃本「道風青柳硯」と錦絵

俗説が生まれ、小野道風の柳に跳びつく蛙の逸話が生まれたとも言われていますが、既に18世紀半ばの時点では「誰もが知っている話」だったということです。



小野道風が柳の枝に取り付く蛙を見て思うのは、本来は筆の腕が上がらぬわが身を省みることですが、この『小野道風青柳硯』では、橘早成の謀反が成功する恐れがあることに気づかされるというものです。

その後、江戸時代中期学者三浦梅園の随筆「梅園叢書(1855年刊行)」で、今に伝わる「柳に跳びつく蛙」が出されています。

道風は多くの庶民に知られ親しまれており、この題材の浮世絵も数多く残されています。



小野道風(鈴木春信画)

鈴木 春信

江戸時代中期の浮世絵師。享保10年(1725年)

- 明和7年(1770年)

美人画で人気を博し、浮世絵木版多色摺りの錦絵誕生に決定的な役割を果たし、後の浮世絵の発展に多大な影響を及ぼした。

また、花札で11月(雨)の絵札に道風が描かれています。舞台のイメージが花札の「雨」の札に取り入れられるくらい流布したのでしょう。

なお、この絵には、おかしな点が2つあります。

花札には蛇の目傘と高下駄が描かれていますが、これらが使用されたのは江戸時代になってからです。

花札の絵柄に道風が採用されたのは明治時代からと見られており、此の図柄は明治以降のものとなります。



柳に小野道風

花札に描かれた小野道風

花札は48枚あるが、人物が題材になった絵柄はほかにない。

東名高速道路の春日井のカントリーサインにもこの絵がつかわれています。

観音寺山門に「市川小松師之碑」(大島君川書)がありますが、小松は名古屋市古出来町(岩田氏)で生まれ、女性の歌舞伎役者で市川團十郎の弟子であり、小野道風役が上手で名古屋で好評を博しました。

小松氏が観音寺七世高巖和尚の縁者であることから小松氏の一族によって建てられました。



市川小松と観音寺山門前の碑



松河戸誌研究会

⑤ 道風さんの唄

① 明治 43 年(1910)の『尋常小学読本唱歌』、文部省唱歌「蛙(かえる)と蜘蛛(くも)」が登場しています。

(以降明治 44 年からの「尋常小学唱歌」、昭和 7 年「改訂尋常小学唱歌」に登場)

これは 二つの和洋の逸話をモチーフにしたとされる歌で、一番は、小野道風の話にならったもの。二番はイギリスの話が原典のようです。

カエルとクモの習性に学びながら、あきらめずに目標を達成する努力の尊さを教えようとしています。



改訂版 尋常小学唱歌 2 学年用  
昭和 7 年から昭和 16 年まで使用される。

一、  
しだれ柳(やなぎ)に飛(と)びつく蛙(かえる)、  
飛(と)んでは落(お)ち、  
落(お)ちては飛(と)び、  
落(お)ちても、落(お)ちても、  
また飛(と)ぶほどに  
とうとう柳(やなぎ)に飛(と)びついた。

二、  
風吹(かぜふ)く小枝(こえだ)に巢(す)を張(は)る小蜘蛛  
張(は)つてはきれ、  
きれでは張(は)り、  
きれでも、きれでも、  
また張(は)るほどに、  
とうとう小枝(こえだ)に巢(す)を張(は)つた。

蛙と蜘蛛

♩=80

一 シーダレヤナギニトビツクカヘル  
二 かぜふくこえだにすをはるこぐも

トシデハオチオチオチハトビ  
はつてはきれきれではほり

オチテモオチテモまたはるほどに  
きれでもきれでもまたはるほどに

トウトクヤナギニトビツクカ  
とうとうこえだにすをはつた

② また、大正のころから、時には学校で、時には地域の会合や同窓会で歌われ、現在まで地元で伝えられている道風さんの歌があります。

曲も詞も少し違います。

<p>一、 しだれ柳に 飛(び)つく蛙 跳んでは 落ち、 落ちては 跳(と)び、 跳んだり 落ちたり ひるまぬ程に とうとう跳びつき嬉しい声で カッカカッカ カッカカッカ カァー</p>	<p>二、 それをよく見た小野道風 読んでは 書き 書いては 読み 読んだり、書いたり たゆまぬ程に、 とうとう名高い学者になった。 道風先生、道風先生</p>
---	--

道風さんの歌 平成 6 長縄錠吉 採譜 編曲

軽快に(♩=96) - 前奏 -

- 間奏 -

- 後奏 -

平成 6 年 7 月 長縄錠吉 採譜 編曲

道風さんの歌

mf

1 シーダレ ヤナギニトビツクカエル  
2 それを よく見た おーのの せうふ、

トシデハ オチ オチオチハトビ  
よんでは か き がいとほよみ

オチテモ オチテモ ヒルマヌ ホドニ  
よんだり がいたり せいだす ほどに

トウトウ トビツキ ウレシイ コエデ  
とうとう がくしやど なたか なりマ

カ カ カカ カッカ カ  
とうふう せんせい とうふう せんせい



③ また、2013年10月19日の市制70周年・春日井まつり「市民会館コラボレーションステージ」開催に向けて、春日井市民音楽連盟・春日井児童合唱団・春日井市文化協会等の協力で創造的な企画を意図するなかで、小櫻秀爾氏(作曲家・名古屋音楽大学名誉教授)が作曲されて初演された「小野道風の歌」があります。

和楽器アンサンブル「みずほ」(和楽器・雅楽器大編成)に、公募による市民合唱団35名(女声二部合唱)、それに日本舞踊が加わって披露されました。

【最新版 楽譜】 **小野道風の歌** 作詞 青山 萌絵 作曲 小櫻 秀爾

♩=80 ~ 84 おだやかに

The image shows a musical score for 'Song of Ono no Dorin'. It includes piano accompaniment and a vocal line with lyrics. The lyrics are: 1. しだれやなぎに つゆのはなぬれて - たた - 濡れてたたく影ひとつ 蛙とびつくその様 じっと見つめて筆を取る 小野道風 ひとすりに 書のみち 春日井 小野の里 2. きよながれに まつかわのせおと - きき - 清く流れる松川の 瀨音を聴けば 思い出す あまい香りの涼風と 優しい母の面影を 小野道風 なに想う 書のみち 春日井 小野の里 3. つきのあかりに てらされ てながれ - りよ - 月のあかりに 照らされて 流れるような筆の跡 命けずって書きあげた 今も伝わる 玉泉帖 小野道風 とこしえに 書のみち 春日井 小野の里



「小野道風の歌」初演 (2013年10月19日 市制70周年 春日井まつり 春日井市民会館)

一  
しだれ柳に 露の花  
濡れてたたく影ひとつ  
蛙とびつくその様  
じっと見つめて 筆を取る  
小野道風 ひとすりに  
書のみち 春日井 小野の里

二  
清く流れる 松川の  
瀨音を聴けば 思い出す  
あまい香りの涼風と  
優しい母の面影を  
小野道風 なに想う  
書のみち 春日井 小野の里

三  
月のあかりに 照らされて  
流れるような筆の跡  
命けずって 書きあげた  
今も伝わる 玉泉帖  
小野道風 とこしえに  
書のみち 春日井 小野の里

## ⑥ 道風の切手と踊り

発行日は平成12年(2000)10月20日で、柳に飛びつこうと努力するカエルの挙動を眺めている小野道風を描いており、背景には小野道風筆の「玉泉帖」を配しています。

踊りは、最近になって創られた「道風音頭」、「道風くんのテーマ」などがあるが、現在、市民の方に踊られ親しまれています。

【参考】この本「松戸の沿革」の表紙の絵は、この切手の道風をバックに庄内川が描かれています。



### (3) 道風の中かりの地

#### ① 道風のふるさと松河戸(小野)の里

道風は幼少時代を松河戸で過ごし、10歳ころに父とともに京に上り書で身を立てました。

道風が幼児期をすごした「小野の里」はどのような場所だったのでしょうか。

この地域は「安食荘」と呼ばれていたことが「醍醐寺文書」に記されています。

「安食荘」は春日井西南部から名古屋市北区北部にあったとされる荘園で、その東限については定かでないが松河戸もその一部といわれています。

6世紀末に成立し、10世紀初め(914)醍醐寺領になり、一時公領になったが、12世紀中ごろ(1143)に再び同寺領となりました。



当時の松河戸の里の原風景

道風が生まれた時(894)は、安食荘は公領だったと思われま

す。緑滴る松洞山(龍泉寺)清き流れの庄内川、山紫水明の大自然のこの土地での生活であった。

この辺り一帯は水郷で小川の土堤には楊柳が水面に影を写し、そここの池辺には真菰が生い茂り葺切が鳴き、夏ともなれば蛍が飛びかい蛙のコーラスに自然の風物は絶えることはなかった。

里の童と共に金魚すくい、とんぼつり、蝉とりと楽しい日々を過ごされたことと思う。・・・公に天稟の素質があったにせよ、氏より育ちといわれるように公がこの土地で育たればこそ天下の三跡とまで謳われ後世に書聖として名を残されたのもむべなるかなと思う。

五十年の歩み 小野道風公遺徳顕彰会「小野の里」から

道風は10歳ころ母親と別れて父とともに京に上り73歳で没するまで、一度も母親には会えなかったと伝えられています。

生みの母に対す周囲の人々の同情と悲しみは、長く今日まで、地域の人々によって言い伝えられてきました。

観音寺境内にある「道風母子像」と「小母塚」の石碑は、慈愛に満ちた表情で赤子を抱く像の下に「道風」の文字が刻まれています。

道風がこの尾張の地まで来たであろうと思わせる歴史的遺物に、道風揮毫の「醫王山」の木扁額と「春敲門」があります。「醫山」の木扁額は、道風の眼病の治癒祈願と書の上達を祈願するために高田寺(現北名古屋市)に寄進したものと思われま

す。「春敲門」は、朝廷の命による名誉ある公務として熱田神宮の門額として揮毫されたもので、当然その折しも尾張の地に来たであろうことを考えれば母の待つ生家まで足を伸ばした可能性はあったのではないのでしょうか。

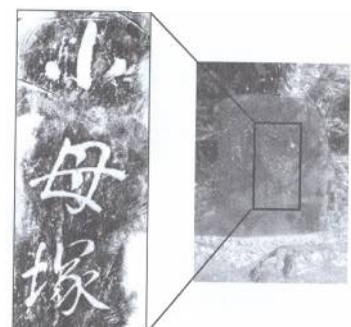
生きて母親に再会できたかは分かりませんが、道風に母親への恋慕の情が墓参りにきたことは想像できます。



▲道風公母の墓石(観音寺)



小野道風母子観音菩薩像(観音寺)



小母塚(観音寺)



## ② 道風のもう一つの生誕を祀る和爾良神社

道風誕生地説については、戦前から松河戸と上条において、生誕地論争が行われてきました。

上条では、「上条の和爾良神社は和邇氏由来の神社で、和邇氏が途絶えた6世紀前半に創建され、その和邇氏を祖とする小野葛くずおが上条に赴任し、894年道風が誕生した。」としています。

現存最古の書論書といわれる「麒麟抄」には、「道風者尾張國上條ニシテ生レ給ヘリ」と書かれていて、このことが和爾良神社にある石碑「小野道風発祥地」碑に刻まれています。

この生誕の地に小野道風をお祀りしていないのは寂しいとして、和爾良神社八百年祭に際して、平成30年(2018)6月、滋賀県大津市にある小野道風神社から和爾良神社へと道風の御分霊がされ、4丁目にあった「小野道風発祥地」碑もその時に和爾良神社へ移されました。

この辺りには、いくつかの道風に関係すると思われる遺物があります。

右下写真の石碑は、用水路側溝の片隅に路傍の石として永い間うち捨てられており、地中深く埋もれていました。

いつ誰が何の目的で建てたのかは分かりませんがなにかを語りかけているように思えます。

上条町7丁目、和爾良神社の東隣に朝宮山大光寺があります。平安時代の延喜式に記載されている式内社のひとつです。

元三大師堂は、天台座主慈恵大師死後の通称として、自然石を本尊として祀ったものだそうです。

その寺内に「道風手植之樹」の石碑があります。竊の木の老木が確認できますが、本当に道風が手植えた樹であるのか否か、真相のほどはわかりません。

何のために石碑を建てたのでしょうか。道風の孫・明尊(天台座主)との縁でしょうか。

また、朝宮神社(朝宮町1丁目)にも、「小野道風手植杉」と彫られた石碑が建っていますが、杉の木の陰に隠れているので目を凝らさないと見つかりません。

上条にある和爾良神社は、この朝宮社を遷座したものであるといわれています。

和爾良神社東隣にある朝宮山大光寺境内にある「道風手植之樹」碑との関係はあるのでしょうか。

少なくとも道風の存在を後世に伝えようとする意図をもって、地域の人々が建てたものと考えることが出来ます。



和爾良神社  
(平成30年6月 小野道風神社の門柱が加わっている)



和爾良神社にある  
「小野道風発祥地」碑



この石碑は、道風橋であることがわかりました。  
平成30年10月、和爾良神社八百年祭に際して大日社境内に移されました。



道風手植之樹



小野道風手植杉

### ③ 小野氏の本拠地と道風の終焉の地

#### ① 小野氏の本拠地

全国では他にも道風公を祀る神社が滋賀と京都に2社あります。

滋賀県志賀小野郷（近江国滋賀郡小野村（和邇村小野）（現在の大津市小野））

は、小野一族の本拠地です。

郷内には小野妹子の古墳、小野妹子神社、小野篁（たかむら）神社、小野道風神社等々が点在し、小野一族繁栄の昔がしのばれます。

写真上はその中心である小野神社本社で、祭神は、あまたらしひこくにおしひとのみこと天足彦国押人命と、たがねつきおほのみこと米餅搗大使主命で、小野一族の祖であると共に餅及菓子の匠・司の始祖である第五代孝昭天皇の第一皇太子天足彦国押人命と同命から数えて七代目の米餅搗大使主命の二神を祀っています。

一族の祖、米餅搗大使主命は餅菓子の元である「シトギ」を考案した神として、アラレ・餅菓子の業者の信仰を集めています。社殿両脇に鏡餅が供えられているのが印象的です。

その南1キロメートルにある、小野道風神社は小さいが風格を感じさせる社殿であり、重要文化財に指定されています。

ここでは、書聖道風公（小野匠守道風命）を祀っていますが、菓子作りに匠たくみ守のかみの称号を賜る先例を作った菓子業界の功労者としても祀られています。

境内に観音堂、文珠堂があり道風直筆という「大般若経」が収められているそうです。



近江 小野神社本社



道風神社（社殿は重要文化財指定）

#### ② 道風の終焉の地

もう一つは京都市北区杉坂道風町（洛中から清滝川に沿って北上、高雄から杉坂口へ）です。

「道風武大明神」が祀っており、松河戸の小野社も「道風武大明神」です。



道風顕彰碑



道風神社本堂 京都

何故こんな山奥に道風神社があるのか史実では明らかではありませんが、道風修行の地と言う伝説があり、道風廟となった埋葬の地でもあります。

美しい北山杉の林の中、訪れる人もなく、石燈籠がひっそりと苔むしており、道風公修行の故事により、道風神社に願をかけ、社殿前の清流を汲んだ水で書や絵を描けば上達が早いと言われています。

松河戸の観音寺宝物庫に「道風公画像」に縫い付けられた歌があります。

村上天皇勅撰による「後撰和歌集」の中に題しらずとし納められたこの歌は、道風晩年65歳頃の歌と言われています。

この「継色紙」が道風の真筆かどうか分かりませんが、「ほにはいでぬ いかにかせまし はなすすき みをあきかぜに まかせはてん」と、道風晩年の境遇を表した情景が映し出され、その心中も想像されてきます。

ほにはいでぬ  
いかにかせまし  
はなすすき  
みをあきかぜに  
まかせはてん



道風公画像と「継色紙」  
（観音寺所蔵）

道風の子泰時が描き、その子明尊が比叡山延暦寺に所蔵していた。



#### (4) 道風の業績

小野道風（おののとうふう 894~966）が生きた平安時代中期は、それまで、数世紀にわたり中国文化を取り入れ模倣していた時代に代わって、日本独自の文化を築こうという気運に満ちた時代でした。

漢詩に並んで和歌が、唐絵とともに大和絵が、漢字をもとに仮名が発明されるなど、国風文化が花開こうとしていた時代でした。

書においても、それまでの空

海・嵯峨天皇・橘逸勢の「三筆」に代表される王羲之ら 書のまち春日井 平成30年11月 春日井市の中国の書に強い影響を受けた中国風の書から和洋の書が書かれるようになりました。

小野道風は、王羲之に影響を受けながらも、それまでの書が中国の書の模倣であったのに対し、新しい和様（日本風）の書を創始しました。

その書はおだやかで美しく、新しい書として高く評価されました。

当時の能書（書の上手な人）として最も名誉ことである大嘗会の屏風や内裏の額字の書き手にも何度か選ばれています。

和様の書の創設者として、日本書道史に特筆すべき人物です。

この和様の書は、道風とともに三跡と呼ばれる藤原佐理に受け継がれ、藤原行成によって完成され、その後の日本書道に大きな影響を与えました。

中国風の書を書いた平安時代初期の能書として、空海・嵯峨天皇・橘逸勢の三人は「三筆」と呼ばれています。

和様の書は、その後少しずつ姿を変えながら、江戸時代末まで日本書道の中心でした。

明治時代になり、政府は公式の書風を和様の書から唐様に切り替え、それに合わせて日本書道も大きく唐様になっていきました。

現在は実用書としての和様の書はほとんど書かれず、歌舞伎の看板で見る「勘亭流」などがわずかにその流れをくむものだとされていますが、書道の持つ芸術性、精神性の面から道風の和様の書がみなおされています。



## (5) 道風ゆかりの作品

小野道風の真跡で現存しているものは5点のみで、①屏風土代(びょうぶどだい)、②智証大師諡号勅書(ちしょうだいししごうちやくしょ)、③三体白氏詩巻(さんたいはくししかん)、④常楽里閑居詩(じょうらくりかんきよのし)、⑤玉泉帖(ぎよくせんじょう)があります。

①「屏風土代」は天皇の命で宮廷に新調された屏風に詩を書くための下書き、②「智証大師諡号勅書」は天台宗の僧侶円珍に智証大師という諡を授ける勅書の清書、③「三体白氏詩巻」・④「常楽里閑居詩」は書の手本として書いたものです。

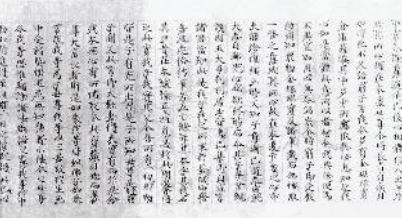

これらは落ち着いてゆっくり書いており、いずれも優美な和様書体で、点画が豊潤で、字形が端正なものばかりです。

それに対して⑤「玉泉帖」は、命を受けて書いたり、手本として書いたりしたものではなく、文字の書体、大小、肥瘦に変化を持たせて自由に書いています。

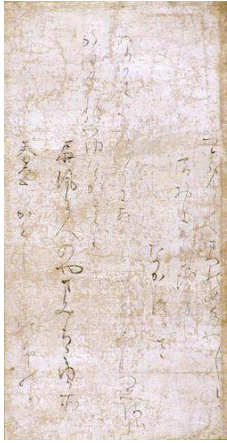
ほかにも小野道風筆と伝えられる書跡(伝小野道風筆)がありますが、そのほとんどは筆者不明のものです。

道風の真筆ではないとおもわれますが、平安時代の優れた筆跡なので道風が書いたのだろうと、江戸時代ごろから鑑定されたのです。

### 道風ゆかりの作品 (書)

1、所蔵 2、作品 3、指定	内 容	写 真
1、観音寺  2、法華経断簡 (ほけきょうだんかん)  3、市指定文化財 伝小野道風筆	<p>経切 26 行は法華経を写経したものの一部で観音寺には 26 行と 2 行の物がある。</p> <p>気品あり風格の高いもので、「平安中期の写経として秀れたものである」。</p> <p>前後が欠けているので伝道風真跡とされている。</p> <p>観音寺所蔵のものは極めて格調の高いものと思われる。</p>	
1、観音寺  2、新楽府断簡 (しんがぶだんかん)  3、市指定文化財 伝小野道風筆	<p>新楽府は、中国の唐の時代の詩人、白楽天の詩で 50 篇から成る連作である。政治社会の事件をとらえて諷刺し、戒めとしようとした。自然な調子を用いて歌曲としてある。</p> <p>観音寺所蔵の新楽府断簡は、胡旋女(こせんじょ)、近習(きんしゅう)を戒む也」の詩で、道風の書の特色である豊潤で優雅、ねばり強い線で和様の特色を出している。</p>	 <p>新楽府断簡(観音寺所蔵)</p>



<p>1、観音寺</p> <p>2、春敲門<sup>しゅんかうもん</sup>の写し</p> <p>3、伝小野道風筆 本物は県指定文化財</p>	<p>縦 87.5 横 43 熱田神宮の東門であった春敲門(戦災で焼失)に掲げられた扁額である。門額は消失を免れており、全体に黒漆を塗り、一行書を彫り下げ、底に金泥を押しした重厚華麗なものであったが、現状はわずかに金泥を残す程度である。</p> <p>隸書体の文字は小野道風筆と伝えられる。</p>	 <p>春敲門の写し (観音寺蔵)</p>
<p>1、道風記念館</p> <p>2、本阿弥切<sup>ほんあみぎれ</sup></p> <p>3、伝小野道風筆</p>	<p>古今集を书写したもので、近世初期に本阿弥光悦(ほんあみこうえつ 1558~1637)が一卷を所有していたので、その他の断簡もすべて本阿弥切というようになった。</p> <p>本品は巻第十八雑歌下の断簡で、白地に牡丹唐草文の料紙に書かれている。古来小野道風筆と伝称されているが、書風などから12世紀前半ころの遺品と考えられる。文字は小さく、筆の弾力を生かして変化を多くした優れた書跡である。京都国立博物館と宮内庁に零巻(れいかん)があるほか、40数葉の断簡の現存が確認されている。</p> <p>1品は、長い間所在不明で、陽明文庫所蔵の近衛家熙(このえいえひろ 1667~1736)の臨書によってのみ知られていたものである。</p> <p>2品は、江戸時代の木版本である『本朝能書伝』に模刻されている。</p>	 <p>16.6×27.2 センチメートル</p> <p>16.7×12.5 センチメートル</p>
<p>1、道風記念館</p> <p>2、八幡切<sup>やわたきれ</sup></p> <p>3、県指定文化財 伝小野道風筆</p>	<p>麗花集(冷夏集)という和歌集の断簡で、もとは冊子本。京都の男山(おとこやま)八幡宮に所蔵されていたので「八幡切」と呼ばれている。</p> <p>料紙は中国から輸入された唐紙(からかみ)で、唐草文様を雲母(きら)で刷り出している。</p> <p>繊細でしかも筆力があり整った書風である。</p> <p>料紙・書風などから11世紀後半の書であると考えられる。</p> <p>麗花集は完全な写本が残っていないため、八幡切は国文学史上でも貴重な資料である。</p>	 <p>24.8×12.7 センチメートル</p>

<p>1、道風記念館</p> <p>2、愛知切 <small>あいちきり</small></p> <p>3、伝小野道風筆</p>	<p>観普賢經（かんふげんきょう）の断簡で、もとは卷子本（かんすぼん）。写経は奈良時代からたくさん書かれているが、平安時代の中頃になるとその書風がやわらかくおだやかな和様になってくる。</p> <p>愛知切は、和様の写経のなかで最も優れたものとされている。小野道風の誕生地が愛知県春日井市だと伝えられることから、愛知切と呼ばれるようになった。</p> <p>同筆の無量義經（むりょうぎきょう）が一巻現存し、これは藤原行成（ふじわらのこうぜい）筆と伝えられている。</p>	 <p>25.1×5.9 センチメートル</p>
<p>1、道風記念館</p> <p>2、紺紙金字法華経断簡</p> <p>3、市指定文化財 伝小野道風筆</p>	<p>①は法華経のうち信解品（しんげぼん）の断簡である。</p> <p>②は法華経のうち如来寿量品（によらいじゅうりょうぼん）の断簡である。</p> <p>紺色に染め、たたいて光沢を出した紙に書かれている。</p> <p>紺紙に金字で写経をすることは平安時代以後に流行し、現在でも多くの資料が見られる。</p> <p>優美な和様の写経であることから10世紀後半ころの書と推定される。</p>	 <p>① 23.0×3.6 センチメートル</p> <p>② 23.6×14.5 センチメートル</p>
<p>1、宮内庁 三の丸尚蔵館</p> <p>2、屏風土代 <small>びょうぶどだい</small> (部分)</p> <p>3、国宝(真筆)</p>	<p>土代とは「下書き」の意で、内裏に飾る屏風に揮毫する漢詩の下書きである。</p> <p>延長6年（928年）11月、道風が勅命を奉じて宮中の屏風に書いたときの書きで、大江朝綱が作った律詩八首と絶句三首が書かれている。署名はないがその奥書きに、平安時代末期の能書家で鑑識に長じていた藤原定信が、道風35歳の書であることを考証しているため、真跡として確実である。</p> <p>卷子本の行書の詩巻で、料紙は楮紙である。処々に細字を傍書しているのは、その字体を工夫して様々に改めたことを示している。書風は豊麗で温和莊重、筆力が漲り悠揚としている。</p>	 <p>22.7×436.6（部分） センチメートル</p>



<p>1、宮内庁 三の丸尚蔵館</p> <p>2、<sup>ぎよくせんじょう</sup>玉泉帖 (巻頭部分)</p> <p>3、国宝(真筆)</p>	<p>白氏文集の詩を道風が興に乗じて書いた巻子本で、巻首が「玉泉南澗花奇怪」の句で始まるのでこの名がある。楷行草を取り混ぜ、文字も大小肥瘦で変化に富んで自由に書いている。</p> <p>柔らかく優雅な和様の書である。</p>	 <p>27.5×187.6 (巻頭部分) センチメートル</p>
<p>1、東京国立博物館</p> <p>2、<sup>ちしょうだいししごう</sup>智証大師諡号 <sup>ちよくしよ</sup>勅書</p> <p>3、国宝'(真筆)</p>	<p>寛平3年(891年)、少僧都法眼和尚位で寂した延暦寺第5世座主円珍が、36年後の延長5年(927年)、法印大和尚位を賜り、「智証大師」と諡されたときの勅書である。</p> <p>文は式部大輔藤原博文の撰、道風34歳の書で、藍の檀紙に行草を交えて太い弾力性のある文字である。</p>	 <p>28.7×156.9(巻頭部分) センチメートル</p>
<p>1、正木美術館(大阪)</p> <p>2、<sup>さんたいはくししかん</sup>三体白氏詩卷 1巻1部</p> <p>3、国宝(真筆)</p>	<p>白氏文集を楷行草の各書体で揮毫したもので、八紙を一巻として、巻第五十三の詩六首分が現存する。</p> <p>ちょうど二首分ずつ、楷・行・草の順に調卷されるが、禄禄二年(1529年)の伏見宮貞敦親王の識語によれば、当時すでに、楷書二首、行書二首、草書二首という現在の形であったことが分かる。</p> <p>三体というのは、楷書、行書、草書、三つの書体で揮毫したためにこの名がついた。彼の遺品の中で唯一の楷書を伝える作品。</p>	 <p>30.6×239.6(1巻1部) センチメートル</p>
<p>1、前田育徳会(東京)</p> <p>2、<sup>じょうらくりかんきよのし</sup>常楽里閑居詩 (1巻1部)</p> <p>3、国宝(真筆)</p>	<p>手本用として、白楽天の詩「常楽里閑居」を書いています。</p> <p>『白氏文集』巻第五「閑適」の第一に収まる一節を書写した断簡で、本文二十二行を有し、啓子の形で伝存する。</p>	 <p>28.2×84.5(1巻1部) センチメートル</p>



## 道風ゆかりの物(松河戸にあるもの)

<p>1、観音寺</p> <p>2、道風公画像</p>	<p>画像は、道風公の子、奉時（ともとき）筆と伝えられ、賛は道風の孫、天台座主の明尊が、道風の歌「穂にはいでぬ いかにかせまし花すすき 身を秋風にまかせはてん」の一首を継色紙に賛した逸品で、この歌は後撰集巻4に出ている。</p> <p>明尊が永承3年(1048)道風の命日に比叡山延暦寺の常院に奉納した旨の添書があり、比叡山から拝請されたものである。</p> <p>道風が木工頭だった60代の頃の絵だとされる。</p>	
<p>1、道風公園 (小野社)</p> <p>2、小野朝臣(道風) 遺跡之碑 (宅跡の碑)</p>	<p>尾張藩の儒学者である秦鼎(はたかなえ)(1761~1831) 撰文の「小野朝臣(道風)遺跡之碑」が(文化12年1815)に道風誕生地跡に建てられ、「松河戸の村民はみな道風がここで生まれたということ伝えている」という内容が刻されている。</p> <p>秦鼎が文章を作成し、中西融が筆書き、河内孫右利が字を彫った。</p>	
<p>1、道風公園</p> <p>2、小野社</p>	<p>現在の小野社の社殿(図1)(図2)は、小野小学校の御真影の奉安殿だった。</p> <p>終戦後壊すように命令されたが、総檜造りで他に類のない立派なもので、取壊すにはしのびずそのままの姿で、「道風屋敷跡」といわれている現在の場所へ社殿として移した。</p> <p>区画整理に伴い、小野社(図2)は、正面を南から東に向きを変えたが、同じ場所に移された。</p> <p>同じ場所にあった小野朝臣(道風)遺跡之碑も同じ敷地にある。</p>	 <p>(図1)小野道風誕生伝説地の祠(移動前)</p>  <p>(図2)小野道風誕生伝説地の祠(移動後)</p>
<p>1、道風公園 (小野社)</p> <p>2、県史跡指定碑</p>	<p>大正4年(1915年)愛知県により、「小野道風公誕生地」の評石が建てられ、そのあと、昭和29年3月、愛知県指定文化財史跡第一号に指定された。</p>	



<p>1、道風公園</p> <p>2、小野道風公生誕の碑</p>	<p>昭和 39 年に、小野道風公誕生 1070 年祭を記念して、小野道風公遺跡保存会によって、「小野道風公生誕の碑」が、安藤直太朗氏の控文と藤田東谷氏の書によって建てられた。</p>	
<p>1、道風公園</p> <p>2、柳にとびつく蛙の像</p>	<p>昭和 31 年に、市内の小中学生の寄付で普段の努力の大切さを教える「柳に跳びつく蛙」の寓話にちなんだ「道風カエル」が設置された。</p> <p>蛙の像の下に、「たゆまぬ 努力 成功のもと」と書かれている。</p> <p><b>エピソード</b></p> <p>蛙の右腕を見てみると、後でくっ付けてあるのが分かります。</p> <p>これは設置して間もなく右腕が折れているのを区長が発見しました。</p> <p>誰が折ったのか分からずにいると、ある小学生が正直に名乗り出てくれました。</p> <p>区長は、名乗り出た子どもの勇気を褒めて、誰にも分からず静かに修理した跡です。</p>	

### その他

<p>1、観音寺</p> <p>2、観音寺十五薬師記</p>	<p>十五の森と十五薬師如来について書かれた額です。</p> <p>明応 3 年(1494)6 月 29 日に矢野家の 15 歳の娘が水難を鎮める為の人柱になったこと、その冥福を祈る為に祀られたお薬師様のことが書かれている。</p> <p>享保 7 年(1722)にお薬師様を修復し開帳供養した際にかかれたもので、十五の森に関する記録としては最古唯一のものである。</p> <p>現在は、字が薄れ判読が困難である。</p>	
<p>1、観音寺</p> <p>2、袴腰付鐘楼</p>	<p>観音寺境内には、江戸時代末期の袴(はかま)腰付鐘楼(しゅろう)がある。</p> <p>この種の鐘楼は市内唯一のものである。</p> <p>嘉永年間 1848～1854 年建築</p>	

#### 参考資料

小野道風について 道風記念館  
書のまち春日井 春日井市

### (6) 小野氏系図・道風年譜

#### ① 小野氏系図

小野道風は、遣隋使で有名な小野妹子(聖徳太子が「日出る処の天子…」としたため、隋の皇帝を激怒させた、あの有名な文書を聖徳太子の元から隋の皇帝まで運んだのは、小野妹子と言われています。)を先祖とし、小野妹子の6代後の子孫に、政治や学問、馬術、芸術(和歌や詩)に優れた小野篁(朝廷の批判を堂々とするような直情型の性格から、「野狂」というあだ名がついていました。常に他者の顔色を伺っている平安貴族には、篁のストレートな性格や行動は、理解しがたかったようです。「地獄で閻魔大王の裁判を補佐していた」という、不思議な伝説も残しています)、また歌人として優れ世界三大美女として有名な小野小町(小野篁の孫、道風のいとこもいわれているが正確なところはわかっていません)や、藤原純友の乱を鎮圧した小野好古を兄に持つ華やかな家系をもっています。

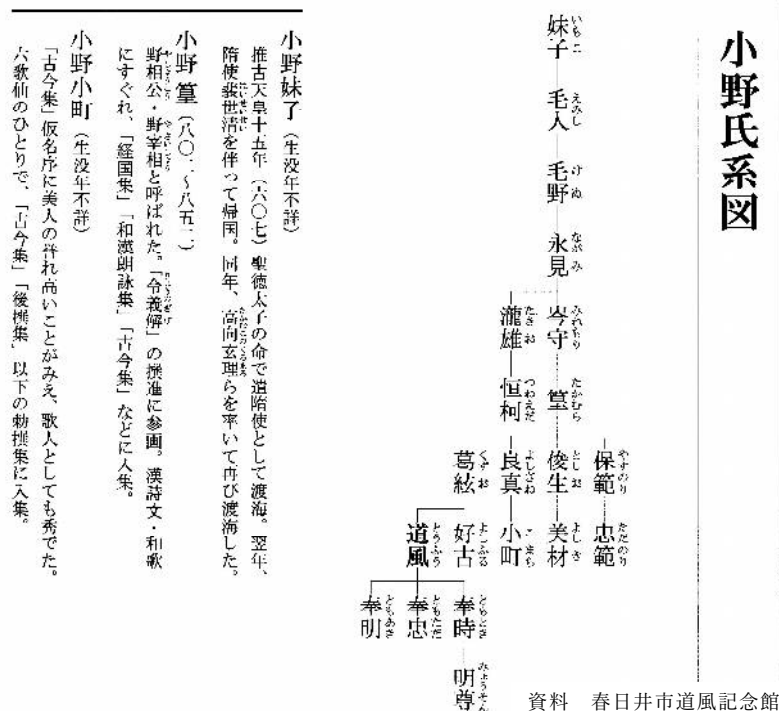
小野氏の先祖は、近江国志賀郡小野村(滋賀県滋賀郡志賀町)に居住していたので、氏の名を小野といい、小野村はもとの和邇村小野といます。小野に小野篁神社と小野道風神社があり小野氏の先祖を祭っています。

道風の父である小野葛絃は、藤原保則が備中守であった時、葛絃は備中掾で、貞観13年(871)備前介に転じ延喜8年(908)に越前守でした。

葛絃は詩人としてすぐれた篁の子であり、能書としてすぐれた道風の父でしたが、詩人といわれるほどの人でもなく、能書といわれるほどの人ではなかったが、善良にして有能な官吏であったと考えられています。

平安時代が下ると、徐々に小野氏は藤原氏や菅原氏などの他家におされ、勢力を失っていきました。篁までは公卿になっていたが、その後公卿になったのは道風の兄で道風より10年早く生まれ、純友の乱に活躍した好古だけです。

小野氏は、地方に役人として赴任することになり、各地で土着化し武士になっていきました。





### ② 小野道風年譜

道風は、能書として 27 歳の時に昇殿(天皇の側近として勤めること)を認められ、醍醐、朱雀、村上天皇 3 代に仕えました。

昇殿を聴されるということは、天皇が居住されている清涼殿の殿上(うら)の間に伺候することを聴されることであり、昇殿を聴された者が殿上人といわれました。

普通、殿上人は従五位以上の人のことで、道風が従五位下になったのは 46 歳の時でしたが、能書として尊重されていたため、27 歳で昇殿を聴されています。

小内記、内蔵権頭、木工頭などの職を歴任し、大嘗会(天皇の即位行事)の屏風や内裏(皇居)の額字を書いたり、書とは関係のない宮廷の修理や宝物の管理にもあたっていた朝廷に勤める役人でもありました。

小野道風は、精力的な華々しい能書活躍にもかかわらず、正四位下・内蔵権頭を最高の官位とするにとどまりました。

西暦	和暦	年齢	事項
八九四	寛平六	一	道風出生
九〇五	延喜五	一二	初めて醍醐天皇に拝謁
九一〇	二〇	二七	能書により昇殿をゆるされた
九一五	延長三	三二	醍醐天皇法華経供養の願文を清書した
九一六	四	三三	入唐する僧寛社に中国に流布させるため菅原道真・紀長谷雄・橘広相・都良香の詩文集と道風の行書「草書」巻とを下賜された
九二七	五	三四	小野則忠とともに薬師経・金剛寿命経・般若心経を書写した
九二八	六	三五	増命に前親の鞍馬を賜る宣命を清書した この年以後曾祖大師監行勅書を清書した 清涼殿南廂の粉壁に漢前以来の賢君名臣の徳行を書いた
九二九	七	三六	屏風土代を書いた
九三二	承平二	三九	先年書いた尊卑障子を書き直した この年以前に醍醐寺の額を書いた
九三三	三	四〇	大嘗会の屏風を書いた
九三九	天慶二	四六	康子内親王変考の屏風を書いた 慈覚大師伝を清書した
九四二	五	四九	丁佐使になった
九四六	九	五三	大嘗会の屏風を書いた
九四七	天曆元	五四	六波羅寺の金泥大般若経書写の助筆をした
九四九	三	五六	坤元録屏風を書いた
九五三	七	六〇	一切経の日録および経一十六巻を書写した
九五四	八	六一	橋直幹の申文を書いた
九五五	九	六二	内裏の屏風を書いた
九五七	天徳元	六四	藤原師輔任右大臣大輔料の屏風を書いた
九五八	二	六五	山城守に遷り、近江権介を兼ねたい旨の申文を菅原文時に作らせて、清書して奉った 根力の衰えのため乾元大宝の文字を書くことができなかつた
九五九	三	六六	藤原芳子内人の屏風を書いた
九六一	応和元	六八	藤原師輔の家の障子の色紙形を書いた 昇殿をゆるされた
九六六	康保三	七三	内裏の殿舎・門の額字を書いた 道風没

活躍する

書き役として晴れの場に出る

小野道風年譜

天皇に拝謁してから昇殿をゆるされるまでの間記録がありません。おそらくこの間は書について学び、あるいはくじけそうになつて、ある時は一心不乱で書を習つたと思われます。

生涯の最後を飾る晴れの書き役  
この後、没(11月12日)まで公の記録がない。  
晩年に書かれた消息(複写)の何通かがみつかると。

65 才頃から目の病気になる  
細字の揮毫は出来なくなる。

円熟時期に達する。

## 貴族の官位、官職

従五位下以上の官位が貴族とされた時代、道風が従五位下になったのは46歳の時、73歳で亡くなった時は正四位下で、三位以上の公卿にはなれませんでした。

同じ能書として謳われた後輩の藤原佐理は35歳、藤原行成30歳にしてともに正四位下参議に任ぜられたことを思うとあまりにも低い官位です。

これは当時の藤原一族を中心とした社会制度を如実に示すとともに、彼の出生の宿命的存在を思わせます。

母親が皇族だった12歳上の兄好古は、公卿である参議まで上り詰めています。

三蹟と呼ばれた藤原佐理、藤原行成に比べ家格門地の低い家に生まれ、里人の娘との間に生まれ外戚の援助が得られず、書を巧妙に書くことができただけで、ほかに優れた長所のない人であった道風は、なかなか高位は望めませんでした。

しかし、道風は当時第一の手書きとして最も尊敬されていました。

道風の書が優秀であるばかりでなく、やさしく、おだやかで上品な書風は、当時から誰からも愛され尊敬されて後世長く手本とされてきました。

官位	官職	備考
正一位	太政大臣	
従一位		
正二位	左大臣、右大臣、内大臣	藤原行成(三蹟の一人)
従二位		
正三位	大納言	藤原佐理(三蹟の一人)
従三位	中納言、左・右近衛大将、大宰帥	小野篁(道風の祖父) 小野好古(道風の兄) ↑公卿
正四位(上・下)	(上)中務卿、東宮傅 (下)参議、式部卿、治部卿、民部卿、兵部卿、刑部卿、大蔵卿、宮内卿	(下)道風没73才
従四位(上・下)	以下省略	(下)道風65才
正五位(上・下)		
従五位(上・下)		↑殿上人道風(下46才)(上49才)
正六位(上・下)		小内記にて榮爵(道風39才)
従六位(上・下)		(下)道風32才)小内記
正七位(上・下)		(上)道風28才)右兵衛少尉
従七位(上・下)		
正八位(上・下)		
従八位(上・下)		
大初位(上・下)		
少初位(上・下)		
<b>最終官位</b>		
小野葛絃(道風の父)	従四位上大宰小式	
小野道風	正四位下・内蔵権頭)	
藤原佐理(三蹟の一人)	前参議正三位兵部卿	
藤原行成(三蹟の一人)	権大納言守正二位兼按察使	

## &lt;参考資料&gt;

春日井市のホームページから「書聖小野道風」・「小野道風」・「春日井市史」・「春日井の歴史物語」

春日井市教育委員会資料

教育委員会

「書のまち春日井」平成30年11月発行 春日井市

五十年の歩み 県下児童生徒席上揮毫大会 小野道風公遺跡顕彰会

小野道風公遺跡 保存と顕彰のあゆみ 松河戸誌研究会

写真と図表で見る松河戸 松河戸誌研究会

五十年の歩み 県下児童生徒席上揮毫大会 小野道風公遺跡顕彰会

小野道風公遺跡 保存と顕彰のあゆみ 松河戸誌研究会

写真と図表で見る松河戸 松河戸誌研究会

小野道風について 道風記念館

松河戸文化科学探求隊

隊長 長谷川 浩

080-3657-7052

松河戸町の沿革ホームページ

<http://matsukawado.com/>